

動物の視点から異なる世界を 発見するための絵画研究

頭が逆さまになった猫をモチーフとして

▶ 查雯婷

はじめに

筆者の研究テーマは、猫の頭を逆さまにして、伝統的な中国文化の中に存在する動物と組み合わせて、新しい神獣を創り、さらにこの世の中の身分、性差、地域、社会の階級などに対する様々な固有的な印象の打破を試みることである。制作を通して、この世界のすべての物事に二つの側面があることを表現したい。たとえ表面上で何かが美しく見えていても、実際には異なる側面を持っている可能性がある。本論は筆者自身の経験を制作動機として述べ、「特定なものに対する元のイメージを打破したい」という目標を論述して、猫のシリーズの初作から神獣の連作、今後の可能性の探求までの過程、作品の背景、創造した技法と表現方法、研究意義などを詳細に紹介していく。

1. 「頭が逆さまになった猫」というモチーフ

過去、筆者の作品を見た多くの人が「なぜ頭が逆さまになった猫を描くのか？」という質問を筆者に尋ねてくることがあった。そこで、筆者が猫を選択して描画している理由について述べたい。

まず筆者は、愛らしい動物の全般が大好きなのだが、なかでも猫は人間に対して懐いたり懐かなかったりする気まぐれな動物であり、その点に関心を持っている。次に、中国やアメリカなどの国には猫（特に黒い猫）にまつわる不吉な伝承があり¹⁾、中国の高年層は猫に対して嫌悪感を持っている人が多い。しかし、若年層には猫は概ね好まれており、これは猫に関する良い側面と言えるであろう。このように、猫を主題としながら、関連する人間による印象の全く違う両面性を表現したいと考えている。

そして現在、現代社会において文明が発展するなかで、我々はインターネットやニュースメディアを通じてさまざまな問題に対して他人の意見を見聞き、逆に自分の意思は正しいかという恐れがあり、素直に表現することができなくなった。このことから、自分自身がもし猫になり、猫の目から世界を観察したなら、全く異なる世界が見えるであろう

うと考え、視点の転換を想起させる表現を試みた。筆者が作品において猫の頭を逆さまにしたイメージを描画している動機をまとめると次のようになる。すなわち、筆者は自分自身の作品制作において、猫の頭を逆さまにすることにより、伝統的な中国文化における吉祥の意味を持つ動物や人間を融合して新しい神獣を創り、さらに古典的な印象の打破を試みている。

中国では「福」という文字を逆さまにして、家のドアや窓などに貼ったら、同音異義語で「福が来る」を意味する。とするならば、もともと「不吉」を象徴する猫は頭が逆さまになったならば、まったく違う意味をもつかもしれないのだ。

2. 作品の始まり

このシリーズの制作は、筆者の世界観から始まった。筆者はすべてに2つの側面があると信じている。違う立場から見ると、それが良いか悪いかに関係なく、良い人と悪い人は相対的であり、何かを判断するための絶対的な基準は無いと考えている。筆者の作品が鑑賞者の物事の両面性についての考えを目覚めさせることを期待している。そして、筆者の過去の経験は、作品を創造する動機や素材の一部になっている。

幼少期に家で猫を飼っていたが、筆者の過失で、この猫は事故で窒息死してしまった。最初は単純な悲しみしかなく、ただ事故だと考えた。しかし、年を重ねるにつれて、世界への理解も非常に深くなり、以前とは考えが異なっている。動物も人間社会のような環境を持っていると仮定すると、それらには強い感情的な変化と伝えたいことがあるのではないかと。筆者が動物の視点からこの社会を観察すれば、もっとそれについて新しい理解が生まれるだろう。

女性としての年齢を重ねるに伴い、結婚をせず特定の年齢で子供を産まなかった場合に、自分と世界との異なるビジョンに苦しむことは想像に難しくない。残念ながら多くの人の心に根強い慣性が残っている。25歳の筆者が日本に来ることを決めるとき、中国人の中にはすでに「結婚」しなければならないと考える人もいる年齢だったため、海外に

行く準備の過程で周りの人から多くの批判を受けた。先入観や伝統的な価値観は時として他者の心を傷つけることがあり、私にとってはこれが初めての経験であった。筆者の作品を見た人が自らの先入観を考え直し、新しい事実や真実を理解し、受け入れようとするを願っている。

2.1 最初の作品

《プリンセスの寝室》(図1)は猫のシリーズとして最初の作品である。統一の手法で画面を表現したくて、水性顔料を使って、無意識に作品を完成させた。水性顔料は油彩より早めに乾燥し、曖昧な雰囲気表現しやすい。ピンクの色は想像していたプリンセスと似合い、奇異な世界を形成した。なぜ最初にプリンセスの部屋を描いたのだろうか。この絵を描いた時、私は一人で日本に来てから一年が経っていた。私は、日本に到着したときの目新しさから、新しい環境への適応、そして家が恋しくなるまでの旅を体験していた。この作品の制作動機には、この世の中で最も安全な場所は幼いころ親からもらった部屋だ、という思いがあるのだろう。また、頭が逆さまになった猫は、来日した当時の筆者の将来に対する不安を表している。はっきり説明できないが、それはずっと心の中に溜まっていた感情のはけ口であり、その後の作品制作においても原点となっている。



図1 《プリンセスの寝室》2017年、水性顔料、パネル
35 × 35cm

2.2 変遷

可愛い明るい色を選びつつも奇異な画面を表現する。筆者たちがいる世界では、表面的に美しさが感じられるものは、実は、その奥に様々な感情が交錯していると思う。例えば、一見美しく見えるが、実際には自然の法則に従わないものがある。

多くの場合、研究者による研究は個人の視点や経験に基づいているが、例えば、動物の視点から見れば、全く異なる世界が見えるかもしれない。人間は社会の環境によって意思が変わってゆくが、猫は猫自身のままで物事を見ている。もし、筆者に猫の目があれば、世界はどのように見えるのか興味深い。シュルレアリズムは具象的な人物や風景を基調として²⁾、無意識を偶然性の強い手法で光、影、色合いなど超現実的な表現を求める表現方法である。シュルレアリズムと違い、抽象主義は具象に拘らずに、点・線・面及び色を用いるもので、シュルレアリズムよりも躍動的で感情的で暴力的な表現方法である。表面的な観点から見れば、これらの異なる二つのスタイルを組み合わせることは困難だが、この二つのスタイルが交差する部分から発想を始めれば、具象化のイメージを構成することができる。筆者の研究は、抽象主義と具象主義の融合を目指すものと考えている。

3. 神獣の連作

3.1 《八駿猫》(技法：巻物にアクリル、色鉛筆、 125 × 350cm、2018年)

《八駿猫》(図2)はこの神獣シリーズの最初の作品である。2018年に描いた中国の伝統的な水墨画の構図と現代の絵画技法を組み合わせたこの作品は、「不吉」な猫を「吉祥」を意味する馬と組み合わせ、新たな神獣を生み出すことによって猫を良いイメージに変化させようとした。十二支に代表されるように、様々な神獣が存在する中国において、猫が神獣になっていることは少ない。

3.1.1 《八駿図》というモチーフ

中国水墨画の有名な画題《八駿馬(はちしゅんめ)》に基づいて構成している³⁾。《八駿馬》とは、中国の伝説に登場し、紀元前11世紀頃の周王朝の穆王(ぼくおう)が所有していたとされる八頭の駿馬である。例えば赤驥(あるいは絶地)と呼ばれる馬は、毛色が真っ赤で土を踏まないほど速く走



図2 《八駿猫》2018年、巻物、アクリル、色鉛筆 125 × 350cm

る。国宝のようなこの馬たちは、平民が名前を持たなかった古代において一頭ずつ名前が与えられていた。

猫は私たちの日常生活の中でより多くの人に親しまれているが、一般的にはその可愛らしさ以外はあまり記憶されていない。猫とは対照的に、同じく一般的な動物である犬は、その忠誠心と機動力から、人間の伴侶として称賛されることが多い。馬は犬と同じように、人間の忠実な伴侶というイメージがある⁴⁾。特に戦争での重要性から、中国では古くから幸運と成功のシンボルとして発展してきた。このような、時間をかけて作られた文化のイメージは、人々の日常生活のあらゆる場面に浸透し、この文化が作り上げたイメージを変えることは困難だ。この猫と馬のイメージを重ねて新たな神獣を生み出すことによって、先述したような猫に対するイメージに何かしらの変化は生まれるだろうか。そんな興味からこの作品は生まれた。

3.1.2 水墨画と現代西洋技法の融合を試す

実際、趙無極（日本ではザオ・ウーキーとして知られる）は20世紀中頃から水墨画と油絵を組み合わせた作品を制作し始めた。彼は幼い頃から中国で水墨画を学び、フランスに移住した後も、西洋の油絵技法を組み合わせて風景を描くために、ヨーロッパ諸国と米国を旅し続けた。

彼の作品のほとんどは大胆に青、赤などの色を組み合わせて、水墨画のような黒い線で風景を描いている。その表現方法からインスピレーションを得て、水墨画と現代西洋技法の融合を試すことを始めた。

水墨画は、他の方法では表現しにくいフリーハンドの筆

致と独特の芸術的概念を有するが、現代のアクリル絵具や色鉛筆によって表現される立体感と明るい色調に欠けていると考えている。筆者の本来の意図は、これらを融合させることにより、二つの手法の利点を組み合わせようとするのだ。

3.1.3 巻物の形状と現代絵具を融合する

これは筆者が初めて東洋と西洋の異なる表現手法の組み合わせを試みた作品でもある。この油絵と長い巻物を組み合わせるという表現は、もともとは水墨画に用いられる巻物を西洋の油絵に変えた新しい創造的なスタイルであり、伝統的な中国美術と現代美術の両方の特徴を持つという筆者が開拓した大胆な試みである。これに基づいて、もともとは水墨画だった絵画技法を現代の色鉛筆とアクリルの技法に変えた。伝統的な中国美術と現代美術の両方の特徴を持たせることを目指している。西洋美術との融合は、新しい創造的なスタイルを形成する。

筆者は、水墨画と巻物の組み合わせには独特の魅力があると考えており、アクリルや色鉛筆などは、水墨画では表現しにくい立体感と明るい色調の特徴を持っていると考えている。したがって、この二つの利点を組み合わせることで、より優れた、よりユニークな画像効果を実現できる。

3.1.4 図像について

この作品は、巻物の中で最もよく使う横構図を採用している。画面では、ギャロッピングシーンからの「八駿猫」が、明るい未来を追いかけているように西に駆け寄っている。



図3 《九猫図・壁》2020年、キャンバス、油彩、181.8×454.6cm

「東」は日の出の方向であり、中国の熟語では良い未来の方向を象徴することもある。例えば、「紫気東来」という熟語の意味は瑞祥の気が東方から来るということである。固有のイメージを打破するというテーマに合わせるため、筆者は意図的に八頭の馬を東から西に動かし、これらの伝統的な表現が私たちの心に固有の印象を与えていることを鑑賞者に気づかせたいと考えた。

3.2 《九猫図・壁》(技法：キャンバスに油彩、181.8×454.6cm 2020年)

《九猫図・壁》(図3)は女子美術大学大学院博士前期課程の修了制作である。また、中国美術において著名な古典絵画の主題として描かれた所謂《九龍図》からインスピレーションを得て制作したものだ⁵⁾。

まず、数字の「九」は奇数の中で一桁の最大の値であり、同音かつ永遠を意味する「久」との関連もあり縁起が良いとされている⁶⁾。また、九は数字の中で最も大きく、古代中国では最高の権力の象徴とされていた。つぎに龍は、皇帝との関連が深く、王室の装飾に用いられてきたことにより現在でも中国文化の象徴である。このように、「九」と「龍」の組み合わせは、最高の高貴さを表現している。そして、龍は実在しない想像の産物ではあるが、実在する動物たちの体を組み合わせ、形成されたキャラクターとも考えられている。このような龍の特徴に基づき、猫の頭および龍の体を融合させた神獣を創造した。

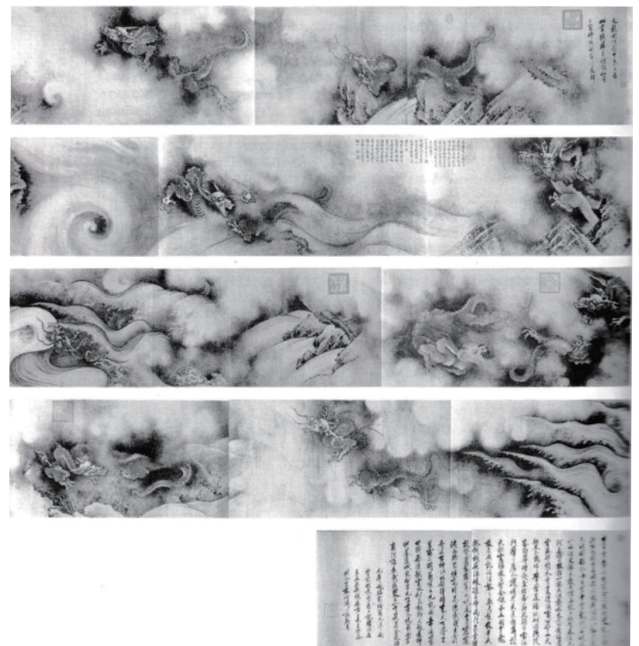


図4 陳容《九龍図》南宋、紙本墨画、一部に朱彩、46.3×106.4cm

ボストン美術館『ボストン美術館の至宝——中国宋・元画名品展』、1996年、pp.158より転載

元来、龍は王権を象徴する特別なモチーフであり⁷⁾、王室以外の人間による使用および変更は許されなかった。しかし、現代の中国社会は伝統的な封建的イデオロギーを放棄しており、龍は王族のシンボルから中国の伝統文化のイメージへと徐々に変化している。一方、猫はペットとして一般

家庭に入り、大衆文化の象徴となった。このように、「伝統」の龍と「現代」の猫の融合によって神獣の新しいイメージを創造した。

南宋時代には「九」と「龍」を融合した《九龍図》(図4)という作品があり、中国の龍を描いた現存する絵画の代表作と呼ばれている。この《九猫図・壁》は「九龍図」からインスピレーションを得たものである。《九猫図・壁》を制作することにより、各々の固定観念を破って新たなイメージを受容し、さらに現代社会における人間同士のコミュニケーションの複雑かつ困難な状況の打破につなげることを意図した。

3.2.1 図像について

古代中国の壁画や彫刻などに共通の水平構成を使用してみた。八匹の獣の主人公の周りで、獣は伝統的な「祥雲」模様の雲のような霧の周りを往復し、獣の動きに対する自由と慣性の思考への切望を表明した。この色調は中国の有名な「染付の磁器」の青の色調を参考にしており、元の龍の体はそれぞれ、中国固有の特徴を持つだけでなく、新たな視覚的体験を形成する新しい要素と組み合わせられている。

龍の描写では、雲や霧の感覚を重視することで、龍の頭や爪のイメージを強く伝えることができる。だからこそ、フレスコ画やレリーフ彫刻を参考にして、《九猫図・壁》を作りたかった。龍のイメージと一緒に見られることが多く、「吉祥」イメージが強調される。制作過程では、猫の頭も厳密には逆さまではなく、龍の体の向きに合わせて様々な角度になっている。また、龍の爪の動きに連動して、猫の頭は、中央の猫は優しい表情、左上から二番目の猫は大げさな表情など、さまざまな表情を見せてくれる。この絵では、猫の頭を逆さにしたコンセプトを採用することで、構図、動き、表現の面で、より立体的で豊かな絵になっている。中国の有名な磁器である青磁の色調を選び、立体のイメージをさらに反映させた。この絵の全体的な色調は、白に吉祥の雲、そして青の龍の体だ。龍の胴体を描く際には、青と白のコントラストで立体感をさらに表現し、龍の鱗のラインを強調することで、龍のイメージを立体的な模様になっている。

「壁」をテーマに、作品の左右の幅が450cmであり、平均的な人の身長に対する高さが181.8cm、さらに展示されている作品の下端から床までの高さを重ねて、この作品を見ると、壁のレリーフを見るのと同じ感覚になる。次に、画像の処理についても、壁のテーマに合わせてフラットな効果



図5 《九猫図・滝》2020年、巻物、キャンバス、油彩、450×125cm

を用い、句読点のような効果を得るようにした。

3.3 《九猫図・滝》(技法：巻物に油彩、450×125cm、2020年)

《九猫図・滝》(図5)は龍の体と頭が逆さまになった猫が空から駆け下りる九匹の神獣の画面を描いている。絵のテーマは前作同様陳栄の《九龍図》を参考しているが、表現の仕方が異なり、絵の考え方が大きく変っている。

3.3.1 図像について

まず、構図においては、長巻水墨画作品の大部分は横構図だが、縦構図の長巻にも魅力があると筆者は考えている。「滝」をテーマに、龍のダイナミズムや滝の特徴や美しさを鮮やかに表現し、上から下に高尚な威厳を象徴するため、筆者は450cmの縦巻物でこの作品を制作した。

画面において、本物の滝に似せた縦巻物の表現手法を選んだ。上から下方向に飛翔する九頭の龍の体が描かれているが、そのうちの一头の頭は画面の外にきれて描かれていない。「九猫図」というタイトルからすれば、猫の頭も九つ描くべきであろうが、そのような固有のイメージを打破す

ることを試みている。

3.4 《九猫図・碗》(技法：変形パネルに油彩、直径180cm、2021年)

《九猫図・碗》(図6)は、中国の古代に特有の染付の磁器の碗を参考にしていて、円形の変形パネルを用いた絵画だ。その全体像は完全な碗を象徴しており、伝統的な碗のパターンを作品と組み合わせて、いくつかの固有の印象やルールを破っている。

3.4.1 支持体(図7)

直径180cm ぐらいの円形パネルやキャンパスがなかなかないため、この支持体は手作りした。ベニヤ板の固有サイズによって、直径180cmの正円パネルを作るため、180cmx90cmのベニヤ4枚を半円に切り、上二枚と下二枚を互い違いに重ねて作った。

作品のため、初めて自分で支持体も作ったが、実際にはより幅広く表現手法を得たと考えている。

3.4.2 図像について

この中心の金色の円は二つの意味を持っていると考えている。一番目は参考にした古代から現代までの陶磁器に固有の模様を描くことであり、二番目は人間自身の可能性を縛る鎖だ。中心に描いた金色の猫が一番重要な役割をもつというイメージであるが、実は左下の白い猫が一番表現したいモチーフである。左下の白い猫は中心部分の一番重要な位置に描かれている猫に挑戦することを意味する。筆者の研究テーマはもともと我々の先入観を打破することなので、今までの陶磁器の元の模様を打破することを表現している。

色調は中国の七宝(しっぽう)焼きの色調を参考しており、円形もお碗の内部を模倣している。筆者は、油絵を使って磁器の色調を表現することで、磁器の特別な色調と油絵の立体感の利点を利用し、両者を組み合わせて新しい表現を形成できると考えている。

3.4.3 《九猫図・碗》のシリーズ(図8)

《九猫図・碗》(図6)は本シリーズの一点として構想していて、全部で九点制作する事を想定しているが、現時点で五枚のみ完成している。

なぜ「九」点なのか？前述のように筆者は「九」という数字



図6 《九猫図・碗》2020年、円形パネル、油彩、直径180cm



図7 《九猫図・碗》の支持体



図8 《九猫図・碗》のシリーズ

の特別な意味について言及しているが、「九」は、無限ループも表す。色調は碗のシリーズを九点で構成し、その組み合わせは、この三番目の《九猫図・碗》をのぞき、左から右へ、サン・ト・ブフ釉薬、染付け、ファーランなどの磁器の色調を参考している(図8)。表現技法は磁器の元の模様ではなく、油絵の支持体と技法を使っている。磁器と全く違うイメージの作品で性差、社会階級、地域、人種、年齢などに対して実際に存在するイメージを打破することを表現

したいと考えている。

4. 制作中の作品

4.1 《飛天の九猫楽師》(技法：キャンバスに油彩、 100×720cm、2021年)

《飛天の九猫楽師》は、徐景新と陳大偉による音楽作品「飛天 (Flying Apsaras)」からインスピレーションを受けて制作した絵画である⁸⁾。この音楽作品は、壁画の内容に基づいて古代の楽器を使用して制作されたものである。そして《飛天の九猫楽師》は「飛天 (Flying Apsaras)」の中に使った楽器を九の楽師に使い、音楽を聴きながら、筆者の頭の中に浮かべられた画面を絵にした。

そこで筆者は、壁画の主題となった「飛天」に基づき、飛翔しながら舞踊したり音楽を演奏したりする九体の飛天たちに、逆さまになった猫の頭を融合させて描画し、これを「九猫楽師」と命名した。そして、これらの「九猫楽師」が演奏する楽器はすべて「飛天 (Flying Apsaras)」で再現された古代の楽器を参考にした⁹⁾。描写内容においては、飛天と逆さまの猫の頭、そして楽器と海洋生物(箏と珊瑚、箏篋とタツノオトシゴ、笙と貝、木魚と亀)をそれぞれ融合することにより、新しいイメージの創造を意図した。

また、この作品も《九猫図・壁》における「祥雲」の要素は共通するが、以前との差異は絵画の配置を工夫して空間設計を行ったことだ。なお、壁画に表現された世界は空中のイメージである。これにより、美しい音楽に浸れるような雰囲気や設け、鑑賞者のイマジネーションを促したいと考えている。

背景はまだ始まっていないが、横巻物でよく描いているストーリーを融合して、創作していく予定だ。幅が720cmの作品のため、鑑賞者が見るときの時間の流れも大切だと考えている。

4.2 《猫麒麟》(技法：パネルに和紙、岩絵具、金箔、 プラチナ箔 53×53cm、2021年)

《猫麒麟》(図9)は、日本画の技法を使って作られた最初の作品である。中国では麒麟は応竜の子孫と考えられている。応竜の子孫である麒麟を猫の頭と合わせて描くというアイデアだ。麒麟は伝統的な中国の獣であり、古代人はしばしばそれを才能のある人々の比喩として使用していた。雄は麒、雌は麟だ。この作品は「雌雄」において、左右二枚



図9 《猫麒麟》2020年、和紙、岩絵具、金箔、プラチナ箔、
53×53cm×2枚

の作品を組み合わせ、対称の画面を形成した。日本画の技法を使って、念紙でエスキースを模写し、右側が左側同じ絵を水平に反転して再現することができる。もちろん、金箔の技法は油絵の中、特に古典的な油絵では珍しくない。しかし、胡粉と方解石を使って盛り上げ、プラチナ箔で鱗の光を示す技法は、鱗の質感が高度に表現され、比較的簡単に細密なりアルさをもって真を再現することができる。これにより、筆者は油絵と日本画を組み合わせる可能性も模索していきたいと考えている。

5. 今後の可能性

5.1 《猫と十二支の物語(仮)》(技法：屏風に油彩、 金箔、100×300cm、2021年)

この作品は、東アジアで広く知られた概念である干支の説話を参考にしており、この説話において猫が十二支に選ばれなかったことを主題とする¹⁰⁾。ある説話によると¹¹⁾、神が干支を決めるにあたり、動物たちに向けてある時間に集めた上位十二番までの者を干支に選ぶ事を告げたという¹²⁾。しかし、腹黒い鼠の策略により猫は最後まで家で寝てしまった。これにより猫は鼠の天敵になった。このように、十二支のモチーフは東アジアにおいて様々な想像を呼び起こしてきた。そこで、十二支に対する固定観念を逆転させ、それを象徴させるべく逆さまの猫を描画することを計画している。

5.2 《猫の滝登り(仮)》(技法：変形パネルに油彩 直径180cmの半円、直径120cmの半円、2021年)

中国の古代の民間伝説の、「鯉の滝登り」という物語からインスピレーションを得て、この作品を制作するつもりだ。

鯉はもし滝を登ったら、龍になれる。筆者の作品はいつも固有のイメージやルールなどを打破することを目論んでいる。この鯉は地位が低い人たちを象徴していて、龍は地位が高い人たちとこの世の中に固有のルールや階級を象徴するモチーフとして描く。画面は二枚半円形パネルに描き、真ん中に世界中の乗り越えられないギャップを象徴を配する。このようなパネルを使う表現手法は初めての試みとなる。

終わりに

本論では筆者自身の経験を制作動機として、世の中の身分、性差、地域、社会の階級などに対する先入観を変えるために制作した、最初の作品から今後の可能性までを論述し、最も重要な神獣の連作については、インスピレーションを得た作品の背景、融合した古代と現代の表現技法、制作する意義などを詳細に説明した。作品の背景を詳しく説明することを通じて、自身の作品と融合する理由やそれを通じてどんなものを表現したいかを解説したが、これから更に「頭が逆さまになった猫」というモチーフを中心として、いろいろな表現手法を試み、作品のシリーズとし、表現方法の幅を広げていくつもりだ。

註

註の書誌情報については、原文表記のあとカッコ内にその日本語訳を付記した。

1. アメリカでは、「黒猫が目の前を歩いていたら、必ず悪いことが起きる」という通説がある。陈文林 (陳文林)「传说种种话黑猫」(伝説種種話黑猫)『世界博览』(世界博覧)、(世界知识出版社、1994年)(世界知識出版社、1994年)、p. 58。
2. 龚平 (龔平)「超现实主义绘画」(超現實主義繪畫)『中国美术』(中国美術)、(人民美術出版社、2012年)(人民美術出版社、2012年)、p. 154。
3. 张长虹 (張長虹)「穆王八骏天马驹、后人爱之写为图：唐代《八骏图》绘画题材研究」(穆王八駿天馬駒、後人愛之寫為圖：唐代《八駿圖》繪畫題材研究)、(十院校美術考古研究文集、2013年)(十院校美術考古研究文集、2013年)、pp. 33-41。
4. 董彦屏、杨怀念、刘芹 (董彥屏、楊懷念、劉芹)「论“马”的象征意义」(論“馬”的象徵意義)『文学教育』(文学教育)、(武汉决策信息研究开发中心、2019年)(武漢決策信息研究開發中心、2019年)、pp. 122-123。
5. 朱万章 (朱萬章)「泼墨成云 喷水成雾：陈容画龙解读」(潑墨成雲 噴水成霧：陳容畫龍解讀)『文物天地』(文物天地)、(国家文物局、2017年)(國家文物局、2017年)、pp. 58-62。
6. 温偲睿 (溫偲睿)「中西方文化中数字“九”的对比与翻译」(中西方文化中數字“九”的對比與翻譯)『科教导刊(中旬刊)』(科教導刊、中旬刊)、(湖北省科学技术协会、2011年)(湖北省科學技術協會、2011年)、pp. 260-262。
7. 陈创生 (陳創生)「龙：一种图腾符号的象征意义」(龍：一種圖騰符號的象徵意義)『岭南学刊』(嶺南學刊)、(中国共产党广东省委党校、2002年)(中國共產黨廣東省委黨校、2002年)、pp. 95-98。
8. 陈若华 (陳若華)「如诗如画如歌：论徐景新艺术歌曲《飞天》的艺术特征和演唱分析」(如詩如畫如歌：論徐景新藝術歌曲《飛天》的藝術特徵和演唱分析)『音乐大观』(音樂大觀)、(山东省音乐家协会、2013年)(山東省音樂家協會、2013年)、pp. 20-23。
9. 庄壮 (莊壯)「敦煌壁画乐器组合艺术」(敦煌壁畫樂器組合藝術)『交响：西安音乐学院学报』(交響：西安音樂學院學報)、(西安音乐协会、2008年)(西安音樂協會、2008年)、pp. 9-19。
10. 曲明月 (曲明月)「浅析中日十二生肖谚语中的动物意象」(淺析中日十二生肖諺語中的動物意象)『湖北函授大学学报』(湖北函授大學學報)、(湖北开放职业学院、2015年)(湖北開放職業學院、2015年)、pp. 103-104。
11. 白蓉 (白蓉)「《中国民间故事集成》中的十二生肖故事」(《中國民間故事集成》中的十二生肖故事)『汉字文化』(漢字文化)、(北京国际汉字研究会、2017年)(北京國際漢字研究會、2017年)、pp. 68-70。
12. 李超 (李超)「十二生肖中“十二”的文化背景探述」(十二生肖

肖中“十二”的文化背景探述)『山西师大学报(社会科学版)』(山西師大学報、社会科学版)、(山西师范大学、2012年)(山西師範大学、2012年)、pp.91-92。

A painting research to discover a different world based on an animal's viewpoint: The motif of cats with inverted heads

ZHA Wenting

The theme of my research was to turn the cat's head upside down and create new sacred animals by combining with people and animals that carry symbolic meaning in traditional Chinese culture. Through this creation, I wanted to express that there are two facets to everything in this world. Even if something looks beautiful on the surface, there would be another completely different side.

People who see my paintings often ask me two questions. The first question is “Why cats?” Actually, I love all cute animals, not just cats. However, cats may be the most controversial among all the animals I like. There have been many legends about the inauspicious nature of cats since ancient times. Many older Chinese people are influenced by these legends and dislike cats. On the other hand, many young people love cats in modern society. Therefore, I chose cats as the core subject to express bilateral impression of human beings (good or evil) who see them.

“Why is the cat's head upside down?” To explain this second question, I usually thought that if I could become a cat and see the world through its eyes, I might be able to see a completely different world. Nowadays, people are used to hiding their true feelings in the world flooded with information from the Internet and news media. Therefore, I wanted to use the upside-down cat's head to remind people that we should also see the world from a different perspective.